提出日　平成 26 年 3 月 27 日

平成25年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 （該当に〇）	海外共同　・　共同研究　・　個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	加藤　令子 看護学部　　教授	
研究課題名	シミュレーション教育による小児看護学演習の展開とその評価 演習カリキュラム導入による教育効果の検討	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
西田　志穂	看護学部・専任講師	・新カリキュラムの展開 ・カリキュラム評価ツールの作成
研究期間	平成２５年４月１日　～　平成２６年３月３１日	

海外共同研究を実施することになった経緯（海外共同のみ）

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

国際学会（ポスターセッション）

Nishida, S. & Kato, R. Development of Worksheets and Evaluation Index Using PBL Case Scenarios for Child Health Nursing Practice Course in Undergraduate Education. The 3rd World Academy of Nursing Science. Seoul, Korea, October 2013.

研究実績の概要（1）

1）新カリキュラムの評価ツール開発を行い、新カリキュラムによる演習を展開した。
2）シミュレーション教育プログラムに参加し、シミュレーション教育の重要性、シミュレーション教育における指導のスキルの獲得および評価等について学んだ。
3）新カリキュラムによる演習の教育効果の評価と新カリキュラムの修正点の抽出を行った。

1）新カリキュラムの評価ツール開発と演習の展開

平成24年度総合文化研究所研究助成により行った「小児看護学演習におけるシミュレーション教育の本学導入の検討：問題基盤型学習（PBL）を用いた授業と連動したカリキュラムの開発」（研究代表者：加藤令子）により開発した新カリキュラムに対する評価ツールの開発を行った。本ツールは、授業目的・目標に応じた学生の達成度を評価するものであり、演習内容毎に学生の達成目標を提示し、学生自身が目標を確認して達成できるようにした。具体的な評価内容は、授業中の参加状況、授業内容の理解度、および、事前学習と事後学習内容等であり、すべて学生自身が評価する。本ツールを用いて演習を展開した結果、到達目標を確認しながら演習に取り組むことができ、学生の主体的な学習を促すことにつながった。また、学生自身が学習内容を評価することにより、自身の課題が明確になるため、学習不足等を自ら補う行動に向かうことが可能となった。

2）シミュレーション教育プログラムへの参加：Fundamentals of Simulation Instructional Methods for Japan

本プログラムは、Okinawa Clinical Simulation Center と University of Hawaii John A Burns School of Medicine Sim Tiki Simulation Center が主催したものである。平成25年8月31日（土）・9月1日（日）の2日間、東京慈恵会医科大学（東京都）で開催された。プログラムは講義と実践とからなり、講義は日本および世界のシミュレーション教育の現状と課題、シミュレーション教育の基本、指導のスキル、評価と試験等により構成されていた。実践は、チームよる Trauma Care のトレーニングである。

参加者は、医師・看護師・大学教員等であり、医療現場や医療にかかわる教育におけるシミュレーション教育の必要性の高まりが認識できた。また、本セミナーを受講し、シミュレーション教育における指導者の質の担保、目的に応じたシミュレータの選択、学習者を主体としたディブリーフィングの重要性を学ぶことができ、これまでの小児看護領域のシミュレーション教育を活用した演習の振り返りとなり、今後の教育の在り方に大きな示唆を得ることができた。

3）教育効果の評価と新カリキュラムの修正点

短大看護学科の1学年の学生数は100名である。学生は、子どもと接する機会が少ないため、子どもへの接し方や様々な成長発達段階に応じた子どもへのケアを学ぶことを必要とする小児看護学の教育には、シミュレーション教育は重要である。シミュレーション教育は1学年を2クラスに分けて実施しているが、1クラス50名はシミュレーション教育を実施するには非常に多い学生数であり、全員がシミュレータを用いたシミュレーションの実施は難しい状況にあった。

研究実績の概要（２）
そのため、本年度の総合文化研究所研究助成により、様々な種類のシミュレータを購入した。各授業の目的により、活用するシミュレータは低機能～高機能の中から選択することが必要である。本年度、多くのシミュレータを購入できたことで選択の幅が広がり、教育目標により適合した授業展開が可能となったこと、評価ツールを活用した授業展開ができたことで、学生の学びは深まったと評価できる。今後は、学習者である学生を主体としたディブリーフィングについて検討していく予定である。